

北九州市響灘ビオトープにおける生物多様性の保全の取り組み・グリーンインフラとしての活用事例

～草地・湿地の生態系保全からワイズユースへ～



安枝裕司*(株式会社 エコプラン研究所)、
長谷川啓一(福山コンサルタント)、
深町健太郎(福山コンサルタント)、
デワンカー ハート(北九州市立大学国際環境工学部)

背景

- ✓ 生態系を構成する草地や湿地は減少し続けている
- ✓ 子どもたちの自然体験の場所や機会も減少し続けている
- ✓ 北九州市は工業都市でありながらも自然環境は豊か
- ✓ 2019年度より指定管理者制度の下、響灘ビオトープを管理運営

景

目

- ✓ 全国的に草地が減少を続ける中、元産業廃棄物処分場であった埋立地が生物生息空間として再生した響灘ビオトープには、草地・湿地ならではの野生生物が生息している。
- ✓ チュウヒ、ベッコウトンボやカヤネズミなど絶滅が危惧される生き物も生息するが、それ以外の在来野生生物も守る。
- ✓ 重要な生態系の一つである草地・湿地は、放置することで陸地化、森林化が進むと予想される中、人が手を入れることで草地・湿地としての生態系保全とともに、身近な自然環境について学べたり、体験活動の場としたりすることで、自然環境と上手につきあひながら暮らせる社会を創造する。

的

響灘ビオトープ概要

市民が生物多様性に配慮しながら自然とふれあえる魅力ある自然環境学習拠点としてH24に開園、年間来園は約1.9万人
 ◎住所：北九州市若松区響灘一丁目126-1
 ◎広さ：約41ヘクタール



昆虫など生物を捕まえる体験の有無の変遷
 出典「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」
 (H22、国立青少年教育振興機構)

方

生態系保全
 野生生物の出現時期を考慮し、スタッフ自らが刈り取る植生管理や生物保全に関する調査など



その他
 ・野鳥、トンボ頭数、チュウヒ行動等の調査
 ・外来種(スクミリンゴガイ、ウシガエル捕獲)

ワイズユース 生態系を維持しつつ、学びや恵みを持続的に得るための活動を生物の保全を通して様々な団体・機関と協働



その他、草原迷路や園外での出張講座や保全活動支援の他に音楽やスポーツ分野など異分野とコラボも

結果と考察

- 利用者数や受益者の人数は、前管理者より増加させられた一方、生物多様性についての成果はまだ明らかにできていない。生物調査により経年の変遷状況を見ながら保全方法も随時検討する必要がある。
- 生物多様性の保全は専門家や行政だけでなく、一人ひとりが正しく理解し、行動につなげる必要があるが、異分野とのコラボを通じて関心の高くない層にもアプローチできた。
- 本ビオトープは元産業廃棄物処分場跡地が生物生息空間になった数奇な歴史があり、ここでの保全と活用の手法は都市と自然が共生するモデルとなると考える。

まとめ

生物多様性の損失は急速に進み、その対策は喫緊である。草地や湿地は特に都市部での損失が進んだが、損失による生活への影響はわかりづらい。

草地の管理は見守ることではなく、継続的に人が手をいれることで保全できることを効果的に理解と伝達できる方法を試行錯誤しながら再生保全モデルの構築を目指す。

